

平井尚志の なめとこ山通信



第68回 この夏の出来事

皆さんこんにちは。この夏は、2年ぶりに行動制限のない夏、ということでしたが、いかがお過ごしでしたでしょうか。私の場合、制限はなくても、東京のコロナウイルス感染者数がいっこうに減らないのを横目で眺めつつ、自主規制を決め込んで、今年の夏もまたほぼどこにも出かけずに過ごした夏となりました。そういうわけで今回の「なめとこ山通信」は他に書くこともないので、この夏をどう過ごしたかという、つまらない報告になりました。ただ、ぼやきと愚痴になってしまうかもしれませんが、お時間ありましたらお付き合いください。

7月下旬になって、私は岩手の兄のところへ、今年も帰省しない旨を連絡しました。兄は今、岩手で住職をしています。兄のお寺でもコロナ関係のお葬式があったそうで、まあ仕方ないよねということになりました。(日記を見てみると、昨年の終業式後 21 日の東京のコロナ感染者数は、1800 人と書いてありました。日記につけているんです。凄いな、自分。東京オリンピックのあった夏でしたね。しかし今年は桁が違いますね。ちなみに、2020 年は最初のコロナ禍の夏で、夏休みが短かったんです。8月に娘が、冒険学校の会報原稿書きの手伝いをしてくれています。そんなこともあったなあ。) 結局、3年続けて帰省せずの夏になりました。ただ、帰省をどうしようかなと思っていたのは、コロナのことがあったからだけではありませんでした。

実は私、夏休みに入って白内障の手術をしたのです。春休みから目の調子が悪くて眼科に行ったら白内障だと言われて、夏休みに入ったら手術をしよう決めていました。特に左目の調子が悪かったのですが、片目だけ治すということは無く、片目ずつ2週間かけての手術となりました。あ、手術は日帰りです。経過を見て、1週間後にもう片方です。私の父も白内障の手術をしていました。でも、60 過ぎてからじゃなかったかな。まあお年寄りでも皆さん手術しているようなので、手術に対する不安はありませんでした。そして実際の手術の日、麻酔は局所麻酔で、手術をしている目も、見えているんです、何となくボヤアっと。あっ今、水晶体を抜いたんだ！って瞬間もわかりました、たぶん。そうして全体としての感想ですが、手術はわりと痛かったです。なんだかずいぶん、眼球をグリグリといじられた感じがしました。よく皆さん、あれにじっと耐えてられるなあと思いました。術後は、一日眼帯みたいなもので保護して、翌日視力検査をして、数日眼科に通って順調です。ということで、はいではもう片方の手術、と進みました。そうしてだいたい2週間経って、すっかり手元がはっきり見えるようになりました。私の場合、手元ははっきりしますが、遠くは近視と同じような感じになる眼内レンズを入れたので、術後には新しい眼鏡が必要

ぜひ。

もう一つ、もっとわかりやすく、最後は泣いてしまったのが「護られなかった者たちへ」です。こちらも、今年度の日本アカデミー賞優秀作品賞となりましたが、最優秀を「ドライブ・マイ・カー」に譲った形となった作品です。出演していた清原果耶が、最優秀助演女優賞を獲っています。お帰り、モネ！ 映画は、311の東日本大震災後のことを扱っていて、それがちょっとしたミステリー仕立てで、生活保護という社会問題についても考えさせられ、全体として重く暗いテーマを捉えているのを見応えはありましたが、ただちょっと悪く言えば、良く出来た2時間サスペンスだったかなって感じで、たしかにまあ最優秀作品賞ではないだろうなって気はしました。でも、お薦めはお薦めです。未見の方はぜひ。

そうこうしているうちに、夏休みも終わりに近づきます。どこにも出かけずにこのまま終わりそうなので、何か展覧会とか博覧会とか、今見ておかなくちゃってものはないかと、調べてみました。日本科学未来館で行われていた企画展「きみはロボット」は面白そうだなと思ったのですが、これはやっぱり子どもと一緒にいきたいなあ、そしてうちの子は今年受験生で、親のお出かけに付き合ってくれないことはわかっていたので、諦めました。一人で見に行ってもいいようなものは・・・と思って目をつけたのが、「まれびとと祝祭」という展覧会でした。日本橋の高島屋が会場で、ちょっと遠いのですが、無料です。これは、何だろうって感じです。

「まれびと」というのは、民俗学者の折口信夫が提唱した概念で、祭祀などに超現実の世界から現実の世界を訪れて、またもとの世界にかえってゆくという、人間を超えた存在（来訪神）のことです。定義は難しいですが、たとえば秋田の「ナマハゲ」とか、鹿児島島の「トシドン」と言えばイメージが湧くでしょうか。私も、「なめとこ山通信9」で、岩手の「なごみ」という小正月の行事を紹介しました。東北地方に伝わる来訪神の行事としては、ナゴミやナゴメハギ、アマメハギ、ナマハゲなど、似たような名称のものがいくつか残っています。折口信夫によればそれらは、海からやって来る来訪神なの

です。同じように九州以南の地域にも、そのような来訪神の風習がたくさんあると言います。それらは、海に囲まれている日本ならではの不思議な風習です。その様な不思議なものに日ごろから興味をもっている私は、何かに呼ばれるようにして日本橋まで出かけて行きました。行ってみると、「まれびとと祝祭」と題されたその展覧会は、ごく小さなスペースでのささやかな展覧会でした。しかしそこにあった、「ボゼ」とか「パーントウ」とか、「マユン



2022年
3月2日(水) — 8月21日(日)
【開催時間】11時~19時 【休館日】月・火曜日
高島屋史料館TOKYO 4階展示室 **入館無料**
東京都中央区日本橋2-4-1 日本橋高島屋S.C. 本館4階
高島屋史料館TOKYO主催
【監修】安藤礼二(文芸評論家・多摩美術大学教授)

高島屋史料館
TOKYO

ガナシ」といった摩訶不思議な神様たちの写真には、見たものを圧倒する力がありました。本当に不思議なものを見たという思いでいっぱいです。展示されている「まれびと」の写真は、多くは石川直樹さんによるものでした。そして石川さんが「まれびと」という写真集を出していることも知りました。私はその写真集を手に入れようと調べましたが、値段は7700円。ちょっと手が出ないかなと思い、図書館で探すと、都立多摩図書館にそれはありましたので、見に行きました。来訪神たちは年に一度村にやって来て、人の体に泥を塗ったり、身に付けていた藁を落としていったりするのですが、そういう足跡に触れることで村人は、1年を無病息災で過ごせるのです。「まれびとと祝祭」展の趣旨は、「古より人類は、幾度も疫病の脅威にさらされてきましたが、我々は祝祭（祭り）と、その時間的・空間的中心に現れるまれびと（来訪神）を信仰することにより、それらを乗り越える経験を重ねてきました。感染症パンデミックにより、不可避的に閉ざされた関係を強いられている現在だからこそ、改めてまれびとと祝祭に目を向け、これら根源に立ち返ることが、現状を打ち破るヒントになるのではないかと考えます。」ということなのでした。思えば妖怪の「アマビエ」もまた、熊本の海から来たということ由来訪神の一種なのかもしれません。自分は、信仰している神様や、大切にしている行事や風習ってあるだろうか、振り返ったりもした夏の終わりなのでした。

8月も末になり、気が付くと周りの教員たちの中にもコロナの陽性者が出て休んでいる人がチラホラ出てきました。そういう中で9月を迎え、2学期は始まりました。コロナの夏って、何だったんだろうねと、いつか思い出せるときはあるでしょうか。とりあえず私は、ボチボチ元気で過ごせています。どうか皆さんが、お元気に日々をお過ごしになれますように。必ずまた、お会いできる日がありますようにと思っています。